

安部公房の読者のための通信 世界を変容させよう、生きて、生き抜くために！



月刊

# もぐら通信

2012年9月30日

創刊号

<http://abekobosplace.blogspot.jp>

あなたへ：  
迷う事のない迷路を通して  
あなただけの番地が届きます

電話

042-ABE-KOBO

FAX

042-KOBO-ABE

もぐら通信を自由にあなたの友達に配付して下さい

サンフランシスコで安部公房の「箱男」の読書会が開催

2012年10月14日夜7時から

Modern Lit Book Club主催

[http://modernlitclub.blogspot.jp/  
2012/09/kobo-abe-box-man.html](http://modernlitclub.blogspot.jp/2012/09/kobo-abe-box-man.html)

安部公房の「箱男」（英訳名：The Box Man）の読書会がサンフランシスコで開かれます。主催はModern Literature Book Clubです。場所は未定ですが、もしサンフランシスコにいらっしゃるならばお問い合わせ下さい。同クラブに照会します。

## 目次

1. 安部公房の愛の思想—序論  
HIROSHI OKADA ... page 2
2. 私の中の安部公房  
wlallen ... page 5
3. もぐら感覚  
タクランケ ... page 6
4. 18歳、19歳、20歳の安部公房  
(連載第1回)  
鷹岩田英哉 ... page 9
5. 編集後記 ... page 11



草むらで写真を撮る  
安部公房。いつ頃の  
写真だろうか？



関西安部公房オフ会  
の9月の読書会は  
「他人の顔」でし  
た。次回は「燃えつ  
きた地図」です。お問  
い合わせは：  
[hirokd267@gmail.com](mailto:hirokd267@gmail.com)



# 安部公房の愛の思想—序論

HIROSHI OKADA

## 安部公房と愛

安部公房はそのシュールな作風で強い印象を読者に与え、一方作品世界の構成や表現には完全なほどの論理性を備えていることは、読者の多くが認めるところであります。先の京都での『他人の顔』読書会でもtakrankeさんや私が言及したところであり、また『砂の女』も阿刀田高氏が絶賛されていたようにそんな作品と言えるでしょう。

ところで、安部公房全集にはそれに異を呈するような記事があったのです。それは全集24巻の贖月報で安部公房スタジオ創立メンバーであった佐藤正文氏が次のように書いておられたところです。（以下一部要約引用）

（稽古場で）なにかどうしても解決できないことがあって、どうしたらこれ解決できるだろうか、ってときに、（公房が）なんだと思うとしつこくみんなに聞いて（みんなが）わかんない（ってときに）愛なんだよって。

最後には愛しかないんだよっていうふうに言うと、既成のある小説家の名前を挙げて、それと一緒にされるからけっして言わないけどねって。

佐藤氏も理詰めでなく愛と言われたことにびっくりしたそうですが、これを読んで私は、自分が安部公房に惹かれる要因のひとつがここにあるのでは、と思いまし

た。それまで私は安部公房のエッセイなどから、彼の思想的な遍歴の真摯な姿勢に彼の誠実さを感じ、それが私の思索に重なるところで安部公房のファンと became ですが、その誠実さ、真摯さの底には彼の愛があるのではないかと思いついたのです。



そのような目で改めて見直すと確かに安部公房は「愛」について深い考察をしている、そしてそれを読者に提示している、はずだと思ふようになりました。ここでこれまでの「論理の作家」から「愛の作家」への評価替えを要請されているのです。

「弱者への愛にはいつだって殺意がこめられている」か

安部公房の愛について考えた時、まずこの言葉に惹かれます。ここには確かに安部公房の愛についての深い思索があり、それは読者である私たちに突きつけられた彼の愛でもあったのです。これについての私の考察を ブログAbe Kobo's place (安部公房の広場) において記しておきました。

〈「弱者への愛にはいつだって殺意がこめられている」か〉 〈「弱者への愛」—安部公房の愛の思想〉 〈弱者とは何か—安部公房の

愛の思想)の三つの文です。 [http://abekobosplace.blogspot.jp/2012/09/blog-post\\_6177.html](http://abekobosplace.blogspot.jp/2012/09/blog-post_6177.html)

そこでは安部公房のいくつかの言葉を読み取ることにより、彼が私たちの「弱者＝保護されるべき、弱いひと」という認識に鋭い問いかけをなし、「弱者」を包摂する社会への逆進化こそ人類進化の必須の法則であり、さらには「弱者こそ社会発展の原動力である」とするとてもラディカルな思想の高みが提示されていたのです。彼の読者への愛は確かに私たちに投げかけられていたのです。

そしてさらに安部公房の愛についての探索を試みたのですが、彼の中期、後期のエッセイなどには直接には「愛」についての言葉は見あたりません。それは意識的に「愛」という言葉を避けているようにさえ思われるほどです。「消しゴムで書く」という安部公房は自分の私生活の痕跡や表現の余剰を消しゴムで注意深く消したのと同様に、「愛」という言葉をもその通俗さのゆえに消してしまっただけでしょうか。

#### 「誠に愛を」と『デンドロカカリヤ』

ところで、初期の作品には叙情的な印象のものが多く、私はこれらがとても気に入っているのですが、ここに安部公房の愛を読み取ることが可能だと思います。(ここで作品の底流にあるはずの叙情や愛は、このあと安部公房の諸作品の中でどうなっていくのか、消えてしまったのかそれとも底流に依然としてあったのか、これは先の読書会で私が呈した疑問です)

そして初期には「誠に愛を」という直接に愛を思索した詩がありました。  
1944/10 全集第1巻より引用

「誠に愛を」

誠に愛を知る者のみが

誠の孤独を知る者ではないだろうか

世界は己の一環に依り閉されたものであり

己は又夜によつて掻き消されるものである故に

誠に孤独を知る者のみが

誠の愛を知る者ではないだろうか

《後略》

「愛」と「孤独」、とさらに「世界」と「夜」の弁証法的なつながりに、いろいろな思索をかき立てられます。

愛の形と中身はさまざまである。叱咤激励する愛、包み込む愛、寄り添うだけの愛、見守る愛、さらに己の生の存在を世界となし、その世界内の存在にまなざしを向け語りかける愛・・・(その世界は認識の上での世界でしかない・・・)だがその愛は絶対的に不可能である。その深淵、その絶望、孤独・・・それにもかかわらず語りかけずにはいられない己の存在。

私には安部公房の愛はそこから始まるように思われるのです。

『デンドロカカリヤ』では

ああ、コモン君、君が間違っていたんだよ。あの発作が君だけの病気でなかったばかりか、一つの世界とってよいほど、すべての人の病気であることを、君は知らなかったんだ!

コモン君へのこの語りかけは、私たちに向けられた安部公房の言葉であり、それは私たちへの愛の言葉であると言えるでしょう。そのように深く痛切に響いてきます。

#### 安部公房の愛の思想のとらえ方

このようにして安部公房の愛の思想を考える時、現在私は三つのレベルでとらえたいと思っています。(→以下はアレンさんwlallenが補足してくださったものです。深謝。)

A. 安部公房の少・青年期以来の「愛」の思考を跡づけ「愛の思想」への高まりをとらえたい。→人間としての安部公房が、どのように「愛」の問題に取り組んだか？

B. 各作品を、安部公房の愛の思想をバックボーンとしたものととらえ、見直してみたい。→各作品に登場する「愛」についての問題をどう解釈すべきか？

C. 安部公房の「読者への愛」を明瞭化しておきたい。→作者としての安部公房が、読者への愛をどのように残したか？

こうして「安部公房の愛の思想」の跡付けはスタート地点に立ったばかりですが、皆さまのご批判やご意見を伺いたいと思っています。

今回の「序論」はここまでにさせていただきます。お読みいただきありがとうございます。ございました。

[HIROSHI OKADA]

\*佐藤氏の贗月報の文には、三浦雅士氏が全集第30巻の贗月報の最後に触れておられるほか、清末浩平氏も強く印象に残されていたことを伝えていただいています。

\*この文全体にわたって、アレンさん、清末浩平氏、Yahoo! 掲示板「安部公房」においてコメント下さった方々のご協力をいただきました。篤くお礼申し上げます。

Yahoo! 掲示板「安部公房」 <http://messages.yahoo.co.jp/bbs?.mm=GN&action=m&board=1000004&tid=0bit8xkbc&sid=1000004&mid=1&first=1>

# 私の中の安部公房

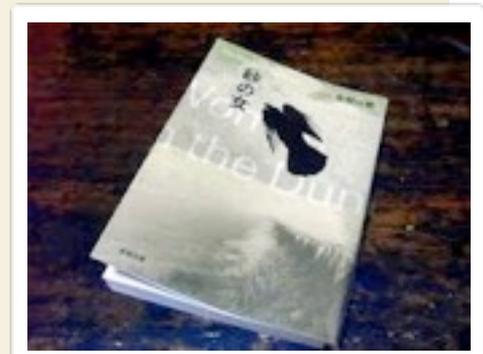
wlallen, 安部公房解説工房

私が初めて安部公房の名を目にしたのは、彼の死亡記事だったと思う。夕刊の一面に出ていたので大作家が死亡したのだなと思ったが、それ以上の思いは格別なかった。彼の作品を読み始めたのは、それから三年ほど経ち、既に大学生になっていた時だった。暇つぶしに、「新潮文庫の100冊」の中の1冊に選ばれている『砂の女』を手にしたというそれだけだった。そこから始まって、安部の作品世界の探訪という「終わりなき道」を歩くはめになるとはその当時夢にも思わなかった。

『砂の女』を読んで、まず驚かされるのは、砂や昆虫についての非常に精緻な記述である。砂の粒径についての文献引用や砂の問題が結局流体力学に属するものであるらしいという私見を入れるあたりは、まるで科学書であるかのような冷静で正確な記述である。それでいて、最初は頑なに抵抗していた村人の論理を受け入れてしまうという主人公の内面心理の変容を細部にわたり生々しく描いている。主観と客観の絶妙なバランスや世界観の逆転など、あらゆる意味で安部の小説は画期的な文学の新製品と言える。

安部の作品は難解であると言われるが、私は彼の作品が面白くて仕方がない。恐らくその当時、彼ほど読者を楽しませようと小説構成を考えてた作家はいなかったのではないだろうか？独特の比喩表現、漫才のような会話、そして多くの作品で見られた手記形式にこめられた切迫感などによって、読者を引き込ませる巧みなストーリー展開には、小説を面白くするためにはどんな手法も辞さないという貪欲さを感じる。しかし、それと同時に笑って済ませられない重大な問題も含まれている。例えば、「自由とはい

たい何なのか？」ということについても困惑させられてしまう。束縛されない自由から束縛される自由を選んだ仁木順平を非難するには、一体どんな言葉が必要なのだろうか？彼の作品には、殺人や詐欺といった常識では犯罪になることがよく出てくるが、それらを単純に非難するのにはためらわざるを得ない。饒舌な加害者の方に負けてしまいそうである。では、寡黙な被害者は一体どこへ行けばいいのだろうか？いや、どこかで加害者と被害者という区分自体が意味を無くしてしまったのだろう。



安部は、極めて論理的に常識を破壊していった。それは、私を固定観念の呪縛から解放してくれたが、同時に飛翔と墜落とが背中合わせの極めて危険な自由を与えられたことも忘れてはいけない。頁をめくるごとに、物語の創造と破壊を目の当たりにするのは面白くもあり恐ろしくもある。しかし、もはや読者という目撃者になった以上、その役を降板することもできないらしい。私は、彼の作品を読み続けなければならなくなり、今に至っている。極めて巧妙な仕掛けだなど、回転車を回し続けるアムダでならぬハムスターは思うわけである。

[wlallen, 安部公房解説工房]

## もぐら感覚

## タクランケ

1

普通ひとは、咲いた花しかみない。咲いた花をみて愛で、嘆賞するものです。

しかし、安部公房というひと、あるいはその読者、もっと言えばその愛読者であるひとは、花などよりも、その花の生まれる土壌とその土の中にある根っこがどうなっているのかということの方に興味のある人間なのだと思います。

種を土の中に播(ま)き、播いた種がどのように発芽するのか、そうして発芽して、それが地上を目指して伸びて行くのか、そのことに興味がある。その瞬間とその場所だけに興味津々たるものがある。

これは、まあ、人間がもぐらになってようなものです。あるいは、もぐら人間です。

安部公房の亡くなった後、遺稿のひとつに「もぐら日記」と題された日記がありますが、日記をそう命名した安部公房の心中は、上のようなものではなかったかと想像します。

土の中に穴を掘って、その穴の中で生活する。

このような人間の、日本語の世界での割合と遠い先達は、吉田兼好だと、わたしは思っています。

花は盛りを、月は隈(くま)なきものを見るものかは

富士山や桜の花の嫌いだった安部公房の言葉と発想に実によく似ているではありませんか。

2

更に、しかしまた、もう少し、安部公房の感覚に忠実に考えてみましょう。

安部公房全集第1巻に「<僕は今こうやって>」と題した、見開き2ページの文章があります。これは、安部公房19歳のときの作品です。

そこにこう書いてあります。

「僕はマルテこそ一つの方向だと思っている。マルテが生とどんな関係を持つか等と云う事はもう殆ど問題ではないのだ。マルテの手記は外面から内面の為の窪みをえぐり取ろうとする努力の手記なのだ。マルテは形を持たない全体だ。マルテは誰と対立する事も無いだろう。」

この「外面から内面の為の窪みをえぐり取ろうとする努力」とは、なにかこう、いかにも土を掘るような感じを与えます。

この「外面から内面の為の窪みをえぐり取ろうとする努力」のことを、後年、安部公房は「消しゴムで書く」と言っています。

(この「えぐり取」という感覚は、造形的な感覚です。わたしはここに、リルケの深い理解をみるものです。リルケの詩もまた、時間を捨象した、即ち変化しない、空間の、造形的な世界だからです。)

もぐらのように外面をえぐり取るということはどういうことかといいますと、目の前にある物事を形象、イメージに転化して、そのイメージを言葉で表すという

こと、作家のこの仕事のことを言っています。

これが、安部公房のいう「詩以前の事」（「第一の手紙～第四の手紙」）を語ることなのであり、その形式が、手記という形式なのです。（安部公房にとっての詩と小説の関係について：[http://sanbunraku.blogspot.jp/2012/08/blog-post\\_28.html](http://sanbunraku.blogspot.jp/2012/08/blog-post_28.html)）

従い、譬喩（ひゆ）でいうならば、安部公房の書いた手記形式の小説とは、みな、語り手のもぐらの手記なのです。

遺稿の中に「もぐら日記」という日記があって、その日記にもぐらを冠した安部公房の感覚は、こう考えて来ると、よくわかります。

わたしも多分、もぐらの中の一匹なのでしょう。

いや、こうして安部公房の愛読者である、あなたもまた。

## 3

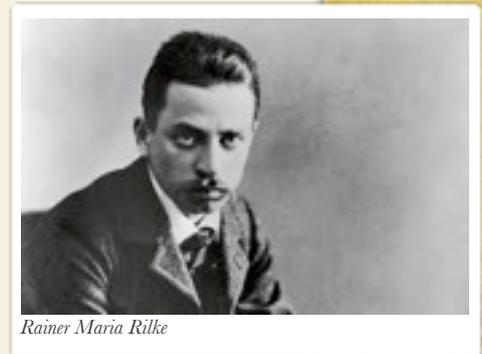
安部公房全集第28巻に「クレオール之魂」というエッセイが収録されています。

これは、題名の通りにクレオールという言語形態を論じた論考です。これは、安部公房の言語論です。

このエッセイの最後に、次のような文章があります。文脈がわかるように、少し長いのですが、引用します。一番最後の段落です。政治、即ち言語による人間の組織化と儀式、そして伝統と、それらと言語の関係を論じてから、次のように言葉を終えています。

「だからと言って絶望するのはまだ早い。バイオ・プログラムとして言語を約束された人間、伝統に刃向かうことを生

得的に運命づけられた人間が、こんな儀式過剰の世界に甘んじていられるわけがないだろう。外では最大規模にまで肥大した国家群が辺境の隅々にまで監視の目を光らせ、異端の侵入を拒みつつけるつもりなら、伝統拒否者は足元の地面に穴を掘りはじめただけの話である。たとえばカフカやベケットのような先例もある。伝統からはかぎりなく遠い、クレオールの魂を思わせる中性的な文体で地面を掘りすすんだ作家たちだ。だからこれからは書物の時代なのかもしれない。内なる辺境への探索には、なんとと言っても書物がいちばんだろう。人間の脳は欲が深いのだ。



Rainer Maria Rilke

[1987.2.24]

また、同じ歳の6月3日に書かれたチャールズという人物に書かれた書簡の言葉を。このチャールズという男性が、安部公房をアメリカに来るように招待したことが、その前後の文面から察せられます。その、やはり、一番最後の段落を以下に引用します。安部公房が超能力少年（スプーン曲げの少年）の話を構想していたときの手紙です。

こうしてみると、何故か「もぐら」という言葉、もぐらの譬喩（ひゆ）は、いつも一番最後に出て来ます。それが、安部公房にとってのもぐらなのでしょう。

「来春ぼくのモグラがアメリカで這い出すまでには、超能力少年との勝負にも決着をつけてしまいたいものです。」

これらの引用を読むと、安部公房が、もぐらというイメージをどう考えて、それが何だと思っていたかは、明らかです。

このもぐら通信の読者であるあなたも、周辺飛行をし、辺境を目指して歩き、社会から拒絶されたときには、ニュートラルな状態と位置に自分自身を置いて、自分の足下に深い穴を掘り、沈思黙考する、書物を読み、深く物事を考える、そのような人間なのです。

そうして、このもぐらは、国を問わずに、国境を超えて、地球の至る所に出現することができる。孤独ですが、自由であるというイメージ。欠乏はあるかも知れないが、誠に自由である。

チャールス宛の書簡の言葉の使い方をみると、次のことがわかります。

1. 安部公房の中に一匹のもぐらが棲んでいる。
2. 自分自身をもぐらに比している。

この1と2は、多分安部公房の意識の中では、渾然一体となっていたことでしょう。

こうなってくると、もぐらの感覚というよりは、もぐら感覚といった方がよいと思います。この一文を「もぐら感覚」と題した所以（ゆえん）です。

あなたも、あなた自身であるもぐら感覚を思い出してみれば、いかがでしょうか。



## 18歳、19歳、20歳の安部公房

麿岩田英哉

## 18歳の安部公房

今回から連載で、18歳から20歳までの安部公房の散文を読んで、一体安部公房が何をどのように考えていたのか、何が苦しみであり、悲しみであったのか、何が関心と興味の中心であったのか、そのことを「問題下降に依る肯定の批判—是こそは大いなる蟻の巣を輝らす光である—」（18歳）、「僕は今こうやって」（19歳）と「詩と詩人（意識と無意識）」（20歳）という三つの文章を読むことによって考えたいと思います。

連載をお読み戴くうちに段々をお解りになるとと思いますが、この三つの作品は、後年の安部公房の小説の展開を理解する上では、非常に重要な作品です。

一言で言いますと、最晩年に至るまでの安部公房の発想と感性の種子が既にし、十分過ぎる位に胚胎しているのです。十分過ぎる位にとは、安部公房の世界の構造を備えているということ、それが別の言葉、別の語彙で語られているだけということなのです。

まづ今回は、「問題下降に依る肯定の批判」を見てみたいと思います。以下、10代の安部公房の思考に寄り添って、その安部公房と一緒に物事を考えることを経験することにします。

1942年12月に、18歳の安部公房は、「問題下降に依る肯定の批判—是こそは大いなる蟻の巣を輝らす光である—」というエッセイを書いている。全集で5ページと少しの分量。

このエッセイは、一言でいうと、人間としての個人の判断の根拠を問うものだ。

その問いを問題といている。問題下降とは、その解答を現実の今ここに見つける努力のことをいっている。当時の友人のひとり、中埜肇宛ての1943年10月26日付の書簡では、「概念より生への没落」と表現している。この友人宛てのその他の書簡も読むと、この成城高等学校時代に読んだのは、ニーチェとリルケ（その形象詩集）である。Untergang（没落）とドイツ語を使っている手紙もある。いづれにせよ、この没落はツアラツウストラの没落に比されている。

さて、冒頭の題の意味は、このような問題下降により、この私のこのように今ある現実を肯定することで時代と社会を批判するという事をいっている。批判するためには、「動かなくてはならない。そして動かさなくてはならない。手を、指を、そして目と鼻を。」といている。このような行為を、安部公房は、座標なき判断と呼んでいる。これを真の反省といい、自覚的な努力といい、「自覚の最初の自覚的発生」といい、「基底となる可きもの—例えば人間存在—に迄立ち戻る」とことと言っている。この座標なき判断は、当の個人が行う「総ての判断は指で触れ、目で見た上で為されねばならない。そうして「其処に始めて最も小さな最初の肯定が生れる」といい、このような肯定を「否定的問題下降の絶対的肯定」と、18歳の安部公房は、呼んでいる。これが冒頭の題の前半、主題部分の意味である。

また、座標なき判断は、宇宙のすべてを知る事ができない天文学に喩えて、この批判の方法は、同時に「全体的な学の形式を取る事が要求される」といっている。後年は、あるイメージの周りに、それまでのあれこれの断片が結晶するのだ

とっていることと同じことが言われている。ひとことでいえば、この批判の方法とそれによって生れる作品は、体系的でなければならないということ、構造的でなければならないということである。

さて、その批判の対象となるものは何かというと、その対象となるものについていっているのが、題の後半、副題部分の「大いなる蟻の巣」である。人間のつくっている社会の全体を蟻の巣に擬している。大いなるとは、文中では偉大なると言い替えられていて、この形容詞は勿論Ironie, アイロニーである。安部公房のHumor, ユーモアを感じる。人間は偉大なる蟻であり、その構成する社会は、偉大なる蟻の巣である。「実を云えば現代社会はそれ自体一つの偉大なる蟻の社会に過ぎないのだ。無限に循環して居る巨大な蟻の巣。而も不思議に出口が殆ど無いのだ。」

と、ここまでエッセイの文を引用してみると、殆どその後の安部公房の小説や作劇の世界の要約であるかのように思われる。遅くとも、この18歳のときには、既にして、後年の安部公房の発想の型は、その比喻も含めて出来上がっているように思われる。このとき、ユープケッチャという虫も生まれていたに違いない。従って、箱舟さくら丸も。

さて、その蟻の社会の出口を求める座標なき判断が、「出口を求める」行為であり、「大いなる蟻の巣を輝らす光である」、その方法なのだ。その方法によって自覚的に生れる場所を、安部公房は「遊歩場」と呼んでいる。安部公房の諸作品の主人公達が求めた、これは、場所ではなかろうか。

この場所は、「一定の中とか、長さ等があってはいけないのだ。それは、具体的な形を持つと同時に或る混沌たる抽象概念でなければならぬ。」（概念から生一混沌へ、生から概念へという思考のプロセスと、そうやって生れる作品のイメージと構造）

この場所は、はじめにあったものではなく、「二次的に結果として生じたもの」（晩年のクレオール論を読んでいるような気がする）であって、その理由によって都市の中から直接その外、郊外に接続しているものであり、「範囲的」に郊外地区を通してゆくものであってはならない。それは、何故かという、市外にある「森や湖の畔に住う人々が、遊歩場を訪れる事があるからだ。遊歩場は、都会に住む人々の休息所になると同時に、或種の交易場ともなるのだ。」（このところの原文は、後年の安部公房の小説を読んでいるような感に捕われる。）

当時安部公房の接して居た直かの社会、すなわち高等学校は、かくあらねばならない場所だと主張している。勿論、現実はそのようではないといっている。

「それに、現代はそれ以上の事に関しては、私に沈黙を要求する。結局要は問題下降の唯一無条件的肯定のみになるのである。」当時の「現代」とは戦時下であり、対外的、社会的な批判は赦されていなかったから、こうして、かくあることを体系的に考える（本当は思弁といたいけれども）ことしか、できなかったといっているのだ。

このエッセイの中で、同じ試みをした先人の名前として、ニーチェとドストエフスキーの名前が挙げられている。

このエッセイをまとめると以上ようになります。

次回は、19歳の安部公房をみたいと思います。

(\*）思考のためのメモ：交易、交換とはエロティックな行為である。なぜなら、それは互いを未分化の状態におくことになるからだ。

(この稿続く)

## 編集後記

2012年9月8日(土)の京都での関西安部公房オフ会の「他人の顔」の読書会の二次会（花園の王将）で、折角これだけの仲間が集まったのだから何か安部公房の通信を出してみたらよいのではないだろうかというつぶやきのような一言から始まりました。しかし、そもそもは、タクランケの安部公房のツイートにHIROSHI OKADAさんが返信を下されたのが切っ掛けです。まさにSNSで生まれた通信です。安部公房が生きていたらどう思うことでしょうか。息の長い通信にしたいと思っております。あなたの投稿をお待ちしております。今後ともご贖下さるようお願い申し上げます

安部公房の広場

連絡先：[ciya.iwata@gmail.com](mailto:ciya.iwata@gmail.com)

差出人:

安部公房の広場

〒182-0003東京都調布市若葉町  
「閉ざされた無限」

2012年9月30日

第1号